

揖斐川水源地域ビジョン策定会議（第3回）

配付資料一覧

- 資料1 揖斐川水源地域ビジョン策定会議（第3回） 議事次第
- 資料2 揖斐川水源地域ビジョン策定会議 委員名簿
- 資料3 揖斐川水源地域ビジョン策定会議（第3回） 出席者名簿
- 資料4 揖斐川水源地域ビジョン 骨子（案）
- 資料5 今後のスケジュールについて（案）

- 参考資料1 揖斐川水源地域ビジョン策定会議（第1回）議事概要
- 参考資料2 ビジョン検討の基礎情報
- 参考資料3 水源地域ビジョン（水資源機構）の事例
- 参考資料4 徳山ダム上流域の保全と利活用に関する打ち合わせ（メモ）

資料 1

揖斐川水源地域ビジョン策定会議（第3回）

日時：平成17年12月22日（木）10:00～12:00

場所：K K R ホテル名古屋 芙蓉の間

議 事 次 第

- 1 開 会
- 2 挨 拶
- 3 議 事

ビジョンの目標像について

- 4 そ の 他
- 5 閉 会

資料2

揖斐川水源地域ビジョン策定会議 委員名簿

【学識等委員】

《座長》	高木 不折	名古屋大学 名誉教授
	安藤 辰夫	自然学総合研究所 副所長
	葛葉 泰久	三重大学生物資源学部 教授
	佐藤 正孝	名古屋女子大学 名誉教授
	下垣 真希	ソプラノ歌手・金城学院大学 講師
	重網 伯明	シルバー総合研究所 理事
	戸松 修	岐阜大学応用生物科学部 教授
	中村 浩志	信州大学教育学部 教授
	水尾 衣里	名城大学人間学部 助教授

【産業等委員】

	大野 睦彦	社団法人中部経済連合会 常務理事
	田中 正敏	揖斐郡森林組合 組合長
	三輪 幸恵	財団法人ふじはし 理事長
	渡辺 信行	NPO揖斐環境レンジャー 理事長

【行政等委員】

	小川 敏	大垣市 市長
	渡邊 俊司	愛知県企画振興部 部長
	浦中 素史	三重県地域振興部 部長
	遠山 周二	名古屋市上下水道局 技術本部長
	加藤 元之	中部森林管理局岐阜森林管理署 署長

【事務局等委員】

	細見 寛	中部地方整備局河川部 部長
	奥田 邦夫	岐阜県建設管理局 局長
	宗宮 孝生	揖斐川町 町長
	井手 義博	独立行政法人水資源機構中部支社 支社長

(敬称略 学識・産業委員五十音順)

資料3

揖斐川水源地域ビジョン策定会議（第3回） 出席者名簿

分類	氏名	所属
学識等委員	高木 不折	名古屋大学 名誉教授
	安藤 辰夫	自然学総合研究所 副所長
	葛葉 泰久	三重大学生物資源学部 教授
	佐藤 正孝	名古屋女子大学 名誉教授
	下垣 真希	ソプラノ歌手・金城学院大学 講師
	重網 伯明	シルバー総合研究所 理事
	戸松 修	岐阜大学応用生物科学部 教授
産業等委員	大野 睦彦	社団法人中部経済連合会 常務理事
	田中 正敏	揖斐郡森林組合 組合長
	三輪 幸恵	財団法人ふじはし 理事長
行政等委員	小川 敏	大垣市 市長
	早川 吉夫	愛知県企画振興部 水資源監（代理出席）
	辻 英典	三重県地域振興部 資源活用室長（代理出席）
	遠山 周二	名古屋市上下水道局 技術本部長
	加藤 元之	中部森林管理局岐阜森林管理署 署長
事務局委員	細見 寛	中部地方整備局河川部 部長
	岩田 礼一	岐阜県建設管理局 水資源課長（代理出席）
	宗宮 孝生	揖斐川町 町長
	井手 義博	独立行政法人水資源機構中部支社 支社長

揖斐川水源地域ビジョン 骨子(案)

《ビジョン》

目標像

切り口A

1千万人の水源文化の創造
- 水源林の保全と利活用の壮大な実験の展開

[考え方]

徳山ダム最大の特徴である山林公有地化を中心に据えたテーマ
三県一市共通の財産であることを踏まえたメインテーマとし、下流域にメッセージを発信
保全等だけでなく公有地化事業の波及効果をサブテーマとし、広域に及び事業の意義・役割を発信
「愛・地球博」や「まんなかビジョン」のテーマ「環境」と関連づけ可能

切り口B

みんなで育む「学び」と「健康」の流域、育てる恵みの森
- 日本一の自然体験流域を目指して

[考え方]

「教育(学び)」と「健康」は国民・老若男女が最も関心あるテーマ
揖斐川町「合併町づくり計画」における将来目標像「健康文化都市」
日本一のダム施設、公有地化した森林を最大限活かせるテーマ
「愛・地球博」や「まんなかビジョン」のテーマ「環境」と関連づけ可能
「みんなでつくる、まもる」は地域住民、NPO等によるソフト活動(運動論)を中心とした魅力ある地域づくりのモデルを目指すもの
抽象的な表現の目標よりわかりやすい表現の目標の方が広く国民の理解や支援を受けやすく、浸透が図れる
「まもる森」については、切り口Aの、の考え方と同じ

切り口C

流域を育てる揖斐川水源地域チャレンジプラン
- 揖斐川水源地域100年運動の展開

[考え方]

水源地域の活性化にとって活動の継続が重要であり、運動論を中心に据えたテーマ
徳山ダム水源地域の保全と利活用に焦点を当てつつ、総合性を位置づけることにより、多種多様な展開が可能
他にない特色等については、取組方針等で詳しく記述
起業的なプロジェクトに柔軟に対応

目標像を達成するための取組

取組方針

目標像を達成するための取組方針を記述

例えば

自然環境の保全と自然環境等地域資源の最大限の活用
多様な主体によるソフト活動
下流域や隣接県との連携

に取り組むこと等に関して、基本的考え方を記述

取組方策

具体的に取組方策を記述

例えば

自然環境の保全の手法・方策(カテゴリー別)
自然環境等地域資源の活用の手法・方策(カテゴリー別)

等に関して、具体的な取組方策について記述

《ビジョン推進方策》

ビジョンの取組推進のための方策

推進方針

ビジョンの取組を推進するための方針を記述

例えば

多くの参画を得て推進体制を構築すること
ダム事業の完了前から取り組むこと
取組を推進するための制度面についても検討すること

等に関して、基本的考え方を記述

推進方策

具体的な推進方策を記述

例えば

推進体制の構築等の方法(特に下流域・NPO法人との連携)
フォローアップの工夫
制度的な対応策

等に関して、具体的な推進方策について記述

アクションプログラム

短期・中期・長期のプログラム

ダム事業完了前からの継続的プログラム

「いつ」「誰が」等の具体的なプログラム

等について留意し作成

〔なお、「検証」「見直し」の手法について検討〕

資料5

今後のスケジュールについて（案）

[平成17年度]

第1回ビジョン会議：10月7日（金）

（内容）会議の設立及び情報提供（徳山ダム建設事業の概況等）



第2回ビジョン会議（現地）：11月15日（火）

（内容）現地視察及び情報提供（他事例や関連計画等）



第3回ビジョン会議：12月22日（木）

（内容）ビジョンの目標像について



テーマ毎の小会議：1月上旬から2月上旬

（内容）テーマ（案）： 利活用・歴史・文化、 保全、 推進方策



第4回ビジョン会議：2月中旬

（内容）ビジョンの骨格について



第5回ビジョン会議：3月中旬

（内容）揖斐川水源地域ビジョン中間報告について



[平成18年度] 数回のビジョン会議



「揖斐川水源地域ビジョン」作成・公表（平成18年度中）

参考資料 1

揖斐川水源地域ビジョン策定会議（第1回） 議 事 概 要

1. 日 時：平成17年10月7日（金）13:30～16:30

2. 場 所：桜華会館 松の間

3. 出席者

委 員 高木委員、安藤委員、葛葉委員、佐藤委員、下垣委員
重網委員、戸松委員、水尾委員、大野委員、田中委員
三輪委員、小川委員（代理）、渡邊委員（代理）
浦中委員（代理）、遠山委員、加藤委員（代理）
事務局委員 細見委員、奥田委員、宗宮委員、井手委員
中部地方整備局 大村局長
独立行政法人水資源機構 青山理事長

4. 議 事

- 1) 挨拶 中部地方整備局長
独立行政法人水資源機構理事長
- 2) 設立の趣意について
- 3) 規約及び座長の選出について
- 4) 徳山ダム建設事業の概況について（報告事項）
- 5) ビジョンの内容について

5. 配布資料

- ・資料 議事次第、配布資料一覧、委員名簿、配席図、設立の趣意について、規約（案）、徳山ダム建設事業の概要について、流域の保全と利活用に向けた「揖斐川水源地域ビジョン」（仮称）づくりの考え方、ビジョン策定のスケジュール

6. 審議内容

- 1) 設立の趣意について原案のとおり了解を得た。
- 2) 規約について、原案のとおり了解を得た。
- 3) 座長として、高木委員を選出した。
- 4) 徳山ダム建設事業の概況について報告された。
- 5) ビジョンの考え方について各委員から意見を頂いた。
- 6) 今後のスケジュールについて確認した。

各委員からの主な意見

山林公有地化の意義やダム役割を下流の市民にPRすることが不可欠。

公有地化した山林について、これまで人手を加えた森林をそのまま管理するのか、放置するのか、森林の国土保全機能を高めるのか、50年、100年を見据え、森林をどのようにするのか目標を持つことが肝要。

100年、200年の長期プランが必要であるが、そのためには環境教育で子供たちを育てることが、継続のためには不可欠。そのような意味も含め、目標を伴った実効性のあるアクションプログラムを作ることが重要。

中部全体を見据えて徳山ダムをどう位置づけるのか、ポジティブな攻めの姿勢の挑戦的なものが必要。

森林の管理のためには道が必要であり、それをベースに、子供たちがダムの木の実を育て、苗木を山に戻すようなシステムができないか。

人が手を入れて管理する自然保護も重要。人手を加えないことが自然保護ではなく、むしろ、人が自然に入れる場所を確保し、自然を愛する気持ちや、自然の恩恵を育む感性を取り戻すことが必要。そこで、体験学習や、お祭りなど、100年続くものが必要。

水資源の重要性を発信していくといったような、本質的なダムの意義・機能の学習など、核となる哲学が重要。

利水・治水について教育する場所としてや、調査・研究のフィールドとして日本、さらに、世界に貢献することも考えるべき。

徳山ダムを活かすため、中部圏を視野に入れたダイナミックな水利用の姿について考える機会とすべき。

森林は、育てて、利用するという循環が重要。保護だけでなく、森林を活用した産業興しも検討すべき。

森林水文学など、世界の学者も参加し、世界に誇れる研究フィールド等としての活用もおもしろい。

自然の考え方を整理した上で、子供も大人も研究者も利用できる、水源かん養の森林、下流の小学生が育てる森林など、いろいろなタイプの森林をつくり、「未来への教育の場」とすべき。

徳山の自然を見に来てもらう方法を考えるビジョンとすることが重要。その場合、下流だけでなく、北陸方面にも風穴をあけて欲しい。

歴史・文化を踏まえた方向として、福井等との交流を発展させることも重要。

自然を守れと上流にいうだけでなく、「みんなで守る」ということが重要。

人と自然と共に生きていくことが共生。アプローチしやすい形で、自然を創っていくことも必要。

自然は動いており、ビオトープとしての湿地も管理しなければ森林になる。自然は放っておいてもいいという経済優先の考え方が主流になっており、そこをどうしたらいいのか考えるのも重要な視点。

先進事例など参考になる題材を整理して欲しい。

以上

ビジョン検討の基礎情報

1 徳山ダム

昭和32年に揖斐川上流域が電源開発促進法に基づく調査区域に指定され、昭和62年の徳山村の藤橋村への廃置分合、平成元年の466世帯の移転契約の完了等を経て、平成12年に堤体建設一期工事に着手

平成17年11月末現在、堤体盛立は完了、洪水吐きコンクリート打設99%となっており、平成18年度の夏頃を目途に国道付替工事等の残工事を完了させ、秋には試験湛水を開始し、平成19年度末に完成の予定

完成すれば、ダム堤体積1千370万 m^3 とその総貯水容量6億6千万 m^3 は共に日本一（但し、堤体積については、フルプラン上は、丹生ダム（滋賀県）が1千390万 m^3 で計画されている）となり、日本一のダムとして、揖斐川流域だけでなく、導水路の具体化と相まって、中部圏の治水・利水に大きな役割が期待

2 山林公有地化

平成17年10月31日、岐阜県知事、揖斐川町長、水資源機構理事長により、徳山ダム上流域における山林公有地化事業の基本的な枠組みを定める基本協定を締結

山林公有地化は、国有林等を除く、約1万8千haの私有山林を岐阜県が取得し、取得した山林の管理は揖斐川町が担う計画となっており、数%の人工林について広葉樹林への転換を図るほか、天然林については基本的に自然の推移に沿った管理を行っていく予定

今後、山林公有地化の進展に伴い、公的に管理される森林が広がり、水源林として開発防止等の保全が図られるほか、3県1市の共通の財産として、良好な自然環境の保全・創出や、自然とのふれあいの場、学習の場など新たな交流拠点としての有効活用が期待

3 徳山村

旧徳山村には、塚の宮ヶ原遺跡をはじめ縄文以降の遺跡等が多くあり、早くから人が居住していたことがわかっており、ダム建設に伴う遺跡等の発掘調査は、ほぼ終了し、現在は、取りまとめの段階

中世には、美濃源氏の流れとされる徳山氏が治め、南北朝時代には、後醍醐天皇側の勢力として活躍し、室町時代には、越前朝倉氏と交流を深め、越前鯖江の浄土真宗誠照寺の一派の布教も盛んになり、この当時、閉村当時の集落の原型は既に固まっていたものと推測

近世には、家康に仕えた徳山氏一族の旗本領となり、明治22年、本郷・山手・櫛原・塚・開田（明治8年に池田（上開田）と漆原（下開田）が合併）・戸入・門入の各村が合併し、徳山村が誕生

昭和59年から個人補償契約調印が始まり、466世帯が住み慣れた故郷を移転し、昭和62年に徳山村は閉村し、藤橋村に併合

4 徳山村の生活様式

「おまわり」と呼ばれる誠照寺等の僧侶の巡回への対応や「道場」の管理、屋根普請、ゆい仕事等の互助協同慣行など、社会・生活の多くの場面で集落運営が基礎

昭和初期頃までの焼畑をはじめ、古くから、栃の実の食料への利用、段木(薪)の生産などが行われてきており、栃の実の食料としての依存度が低くなると銘木としての栃板の生産を行い、高度経済成長期にはパルプ用材として収入に当てるなど、森林と深く関わった生活様式を展開

神社は集落毎にあり、それぞれ例祭等が営まれてきたが、昭和62年に住民の移転に伴い現本巢市に「徳山神社」を創建し、各祭神は合祀され、本郷の元服式や戸入の一二灯占祭などの祭祀を継承

5 揖斐川町

466戸の移転世帯は、135世帯の個人移転のほかは旧本巢町等の下流域の5つの集団移転地に移転し、83世帯が旧揖斐川町の表山団地に移転

平成17年1月、揖斐川町、谷汲村、春日村、久瀬村、藤橋村及び坂内村が合併し、揖斐川本川の広大な上流域を管轄する約2万7千人の町として誕生

新町では、緑豊かな森林、薬草、北陸や関西との交流の歴史、多様な伝統文化等を活用するとともに、各地域がそれぞれの個性を生かし合い、揖斐川源流域の責任と誇りを持って、人と自然が共生し、活力に満ちた、健康で文化の薫るまちづくりを進めることとし、目標像として「自然と歴史が育む ふれあいと活力のある健康文化都市」を提示

その中で徳山ダムは、豊かな自然や伝統文化等の地域資源をネットワークした西美濃夢回廊の一つの新しい地域資源として位置づけられており、交流人口の一層の増加に貢献することに期待

6 自然環境

徳山ダム建設事業による環境調査では、植物種約1千5百種、うち重要な種39種4群落、動物種約2千6百種、うち重要な種65種（重要な種の種数については平成17年11月現在）を確認しており、これらに配慮した工事を進めるほか、エビネ等の重要な植物種の移植、アジメドジョウ等の重要な魚類の上流河川への移動放流などの環境保全対策を実施

また、徳山ダム上流域には、クマタカ、イヌワシ等の重要な猛禽類も生息しており、徳山ダム建設事業でも監視等の保護対策を講じているところであるが、

今後の保護について市民等は高い関心

区域の森林は、古くから段木生産等で人の手を入れてきた森林が多く、高度経済成長期にパルプ用材を生産した跡地に成立したミズナラ、ブナ等の広葉樹林をはじめ、天然林が95%程度を占め、人工林率は5%程度（岐阜県の人工林率は45%程度）であり、自然力により成立した森林が卓越

ただし、広葉樹林は大規模なパルプ材生産の跡地に、萌芽更新等で成立した二次林が多く、比較的人手の加わっていない原生的な森林は、国有林等の奥地に存在し、国有林では、保護林を連続させ野生の動植物の保全を図る「緑の回廊」に指定し、福井県側の国有林とも一体的に保全する計画

7 関連事項

徳山ダム上流域は、大垣市等からなる市町村連合により、「徳山ダム上流域水源地生態系保全計画書」が平成14年に策定されており、上下流交流植樹、自然環境セミナー等の活動等が位置付け

計画では、ダム堤体の付近を自然交流ゾーン、ダム湖周辺を流域環境研究ゾーン、ダム湖をダム湖生態系保全ゾーン、その他の区域を自然林保全ゾーンにゾーニング

また、計画は、森林の水源かん養機能の維持向上と、徳山村が廃村になったという事実を重く受け止め、旧村民に方々に感謝の思いを寄せながら大切な自然生態系を保全・創出する地域とし、流域住民、市町村、ダム事業者及び岐阜県が一体となって必要な施策を総合的に推進しようとするもの

参考文献：「徳山村民族誌」田中宣一（2000年、慶友社）

「合併まちづくり計画」揖斐ふれあい町村合併協議会（2004年）

「徳山ダムの記録」藤橋村（1990年）

水源地域ビジョン（水資源機構）の事例

ビジョン名	テーマ等	基本方針等	取組方策等	推進体制等
浦山ダム水源地域ビジョン	交流、既存施設の有効活用といったソフト面による水源地域全体の活性化	水源地域住民が主体となり下流域の人たちと交流を図りながら地域づくり 誰もが訪れやすい自然と共生した新しい観光拠点づくり 森林を水源の森として保全・育成	①住民活動の推進と人づくり ②地場産品の開発 ③イベント・ソフトの充実 ①観光資源・施設の活用と充実 ②水辺環境の保全・育成 ③広報および環境教育の充実 ①森林環境の保全・育成 ②木材利用の促進	・早期実施項目の位置付け ・推進連絡会 ・実行組織
荒川源流ダム水源地域ビジョン	荒川源流のむら・大滝 いきいきプラン〔森・水・人が共生する荒川流域交流圏の形成〕	ダム及びその周辺の個性に調和した生きがいの創出 水源地域の環境の保全と活用による魅力の向上 荒川源流を共有の財産とした交流・連携の推進	①ダム湖の活用 ②ダム湖周辺の環境整備の推進 ③二瀬ダム周辺の道路の改善 ①二瀬ダム・滝沢ダムの連携によるダム・水源地域の情報の発信 ②水辺空間の魅力向上 ③荒川源流の自然環境・景観の保全と活用 ①地域資源の活用による観光交流の拡大、特産品の開発・PR ②荒川源流を舞台とした地域間交流の推進 ③荒川源流の自然を活かした人づくり	・プレ活動 ・行動計画 ・推進委員会 ・推進協議会
奥利根地域ダム水源地域ビジョン	首都圏の水源地環境としての誇りをもち後世に続く美しい水・森・心のあふれる地域をめざす“水源聖地・水上”	地域資源を生かし魅力を高める活動 水上を愛する人々の輪をつくる活動	①森を生かす ②水を生かす ③地域文化を創造する ①活動の輪を広げる ②来訪者を集め情報発信をする ③新たな産業のルールづくり	・要望の把握 ・行動計画 ・推進協議会 ・実行委員会 ・活動部会
下久保ダム水源地域ビジョン	流域内の連携と交流 ダムを活かした水源地域の自立的・持続的な活性化 清流神流川と名勝三波石峡の復活と保全	水を軸にした住民が主体的に取り組む地域活動 地域ネットワークによる交流と連携の推進 保全と活用による地域資源の魅力の向上	地域活動の組織づくり・人材の育成 地域ネットワーク(交流と連携の推進) ①自然環境の保全と活用 ②既存施設・地域資源の活用 ③下久保ダムと神流湖の活用	・開始時期の区分け ・推進協議会 ・推進分科会 ・実行組織
草木ダム水源地域ビジョン	地域を活かし、都市からもらう新たなパワー	地域資源の保全と活用 交流と連携の推進	①森林環境の保全と活用 ②里山環境の保全と活用 ③渡良瀬川環境の保全と活用 ④草木湖環境の保全と活用 ①地域の資源を活かした特産品づくり ②都市との交流促進 ③渡良瀬川を軸とした広域連携	・役割分担による推進 ・推進会議
木曾川源流の里ビジョン	“水源地域木祖村”の自立的・持続的な発展	〔先ずは〕地域を知り、地域に誇りを持つ。 〔次に〕地域資源を活かし、地域経済の活性化を図ろう。	①遊木民プロジェクト(仲間づくり、情報収集・発信) ②四季の彩プロジェクト(景観形成、環境形成) ③源流の里体験・学びプロジェクト(体験学習プログラム開発) ④食の塩梅プロジェクト(商品開発)	・プロジェクト毎の推進 ・木曾川・水の始発駅フォーラム

ビジョン名	テーマ・目標等	基本方針等	取組方策等	推進体制等
岩屋ダム水源地域ビジョン	美しい環境に包まれた魅力的で親しまれるダム 四季を通じて人々が訪れる観光・交流の場	岩屋ダムの活用 観光機能の強化 環境の保全 地域参加・交流の推進	①ダム湖のレク利用 ②ダム湖周辺景観の整備 ③ダム・発電所の公開 ④利便性の強化 ①地域資源の活用 ②観光PRの推進 ③特産品の開発 ④観光施設の整備 ①自然環境の保全・育成 ②自然体験・自然学習 ①住民参加活動の推進 ②地域交流の推進 ③協力・連携組織の設立	・実施時期の区分け ・推進協議会 ・ダム湖面利用協議会
阿木川ダム水源地域ビジョン	ココロうるおす水と緑と歴史のパティオ	美しい自然環境との共生を図る。 既存の地域資源を活かす。 阿木川ダムに対する理解や親しみを向上させる。	①地域環境の保全と向上 ・水質の保全 ・森林の保全、育成 ・環境活動の推進 ②地域観光の活性化 ・既存資源の活用 ・新たな観光資源の創出 ・イベントの開催 ③阿木川ダムの有効活用 ・ダム周辺施設の活用 ・湖面利用の促進 ・ダムを使った学習機会の充実 ④地域産業の振興 ・新たな特産品の創出 ・特産品の販売強化 ⑤地域や阿木川ダムのPR推進	・実施時期の区分け ・推進協議会 ・実施計画の検証・見直し (Plan-Do-See)
日吉ダム水源地域ビジョン	地域に開かれた日吉ダムの新たな展開 (「新しい里づくり」 風土・自然を基盤とした健康で文化的なまちづくり)	現況施設の展開 環境学習をテーマとした展開 周辺施設、地域への広がり	①現況施設の利用・運営プログラムの展開 ②各施設の利用・運営のネットワーク ①ダム周辺を環境学習のフィールドに ②地域の歴史・文化学習 ③ダム周辺施設の利用・活用 ④周辺施設との連携 ⑤周辺地域への展開による新たな地域づくり ①環境学習による流域間交流 ②市民参加型の森づくり ③施設利用者と地元との交流 ④周辺施設とのネットワーク	・ビジョン連絡会
一庫ダム水源地域ビジョン		一庫ダムが担うべき役割を果たす 里山の環境と共生する地域活性化 地域資源の保全・活用による地域活性化 自立的で持続可能な地域活性化を進める	①流域環境の保全・育成 ②里山環境の有効活用 ③知明湖周辺の環境管理の推進 ④知明湖の利用促進 ⑤知明湖周辺の交通機能の向上 ⑥水源地域と受益地域の交流推進	・推進協議会 ・利活用協議会

ビジョン名	テーマ・目標等	基本方針等	取組方策等	推進体制等
布目ダム水源地域ビジョン	魅力度の高い様々な地域資源が立地する水源地域 多彩な地域ネットワークが形成される水源地域 水を軸に地域住民の積極的な活動が行われる水源地域	個々の地域活性化拠点の持つ魅力を高める 地域内ネットワークの強化により既存資源を活かす 水を軸に地域住民が主体的に取り組む	①地域内ネットワークの強化 ②布目ダムの魅力を高める既存施設等の有効利用 ③湖面の積極的な活用 ④水源地域や布目ダムに対する関心・親しみ等の向上 ⑤水源林等自然環境の保全と育成 ⑥地域活動を担う人材の発掘、育成	・実行連絡会 ・ビジョンの見直し
高山ダム水源地域ビジョン	人がむすぶ未来につながる茶と梅薫る清流のふるさと	人と自然が共生する良好な水辺環境 地域資源を活かした質の高いレクリエーション空間 地域住民一人一人の意識を高めつつ、水源地域が主体となって取り組む 地域の実状に応じた取り組みを継続して進める	①ダム湖や周辺河川での水辺環境の保全・向上 ②既存施設等の連携 ③地域産業の振興 ④貯水池周辺における施設等の充実 ⑤貯水池利用の促進 ⑥交流活動の推進 ⑦地域活動の充実	・実施時期の区分け ・実行連絡会 ・ビジョンの見直し等
室生ダム水源地域ビジョン	自然・歴史・都市を包む「室尾ダム文化交流圏」の形成	水源地域にふさわしい環境づくり 地域に親しまれる水辺づくり 地域の自然や歴史、文化を活かした交流圏づくり 人が育つ環境づくり	①周辺山林の保全・育成 ②河川環境の保全 ③ダム周辺における新たな施設整備 ④ダム周辺道路の改良 ⑤既存施設等の活用 ⑥交流活動や人材育成	・実施時期の区分け ・実行連絡会 ・ビジョンの見直し等
青蓮寺ダム・比奈知ダム水源地域ビジョン	地域を越えてつなげよう 木津川をうるおす水いづる郷	美しい自然環境と共生した地域づくり 自立した個性ある地域づくり 多様な地域との交流による地域づくり	①自然環境の保全、育成 ②環境保全に対する意識の啓発 ③地域資源の濫用 ④ダム・ダム湖の活用 ⑤地域情報の発信 ⑥協働のためのしくみづくり	・実施時期の区分け ・実行連絡会 ・ビジョンの見直し等
池田ダム水源地域ビジョン	山と水が織り成す心やすらぐふるさとの水源地域づくり	地域的・広域的な交流・連携を推進する 池田ダムを地域に活かす 豊かな自然環境を守り活かす 地域の資源を守り活かして魅力を高める 将来を担う人材を育成する	①水源地域内や上下流域を倉めた広域的な交流・連携体制の構築 ②イベントの開催による広域的な交流・連携 ③水源地域内や上下流域への情報発信・情報の共有化 ④ビジョン推進組織の構築 池田ダム周辺の既存施設の有効活用と湖面の適正な利用 ①豊かな自然環境の保全と適正な維持管理 ②豊かな自然環境を活用した環境学習の実施 ①観光資源の活用と適正な利用 ②地域の特性を活かした地場産業の育成及び強化 ③歴史や伝統・文化の次世代への継承 担い手の育成	・推進協議会 ・方針毎の部会 ・リーディング施策の位置付け

ビジョン名	テーマ・目標等	基本方針等	取組方策等	推進体制等
早明浦ダム 水源地域ビジョン	住民が自ら築く水源地域の未来 (誇りある水源地域、人々の集まる水源地域・活気あふれる水源地域を目指して)	経済活動の活性化 交流人口の増加 地域の誇りの醸成 人材・組織の育成 安全安心の確保	① 農林業振興 ② 観光振興 ① 研究交流(四国「山地・水源地域学」) ② 学生・生徒研修 ③ NPO 活動 ④ 海外研修生 ⑤ 吉野川講座の現地開催(徳島市民) ① ダム湖利用 ② 文化・伝統の継承 ③ 環境の保全 ① NPO 等組織の育成、支援 ② 人材の育成、支援 ① 治山・治水事業 ② 福祉の充実 ③ 災害時の避難路、避難場所の整備 ④ 警戒避難体制の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・ NPO への支援 ・ 重点メニューの選定及び実施案の具体的提案
銅山川3ダム 水源地域ビジョン	魅力ある銅山川水源地域づくりを目指して	明日の森を育て、水を守る 地域資源を活用した地域経済の活性化 自然と水とふれあいづくり 自然を活かし、広げるふれあいの和 みんなで結ぶあかがねのこころ	① 水源林の保全 ② 河川環境の保全 ③ 環境保全意識の向上 ① 農林業等の振興 ② 観光の振興 ① ダム湖周辺の活用 ② 湖面等の活用 ① 水源地域の P R ② イベントの開催 ① 生活基盤等の整備 ② 地域活動の充実	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実施時期の区分け ・ 推進組織 ・ ビジョンの見直し等
寺内ダム 水源地域ビジョン	流域全体の視点に立ち、多様な面での地域活性化を目指した、地域住民が主体的に取り組むビジョン	水源地としての機能を高める 寺内ダム周辺地域の魅力を向上させる 水を軸に地域住民が主体的に取り組む	① 寺内ダム周辺での水源の森づくり ② あまぎ水の文化村の有効活用 ③ 寺内ダム貯水池の水質保全に配慮した活用	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実施時期の区分け ・ 実行連絡会 ・ ビジョンの見直し等

徳山ダム上流域の保全と利活用に関する打ち合わせ（メモ）

- 1 日 時：平成17年12月6日（火）17：00～20：50
- 2 場 所：ホテルアソシア名古屋ターミナル
（会場：「しゃくなげ」19F）
- 3 出席者：委 員 高木座長、安藤、佐藤、戸松各委員
事務局 中部地方整備局、水機構
- 4 内 容： 徳山ダム上流域の森林の保全と利活用について、どのような認識をもってビジョンに位置づけていくのか、以下のような議論が行われた。

（保全について）

ダム上流域の森林を公有地化し、天然林として保全していくのであれば、長期的かつ広域的な視点で見れば、100年、200年後には、いずれ森林がおかれていく立地条件により、相対的に安定した極相林（例えばブナ林やミズナラ林）に遷移していく。

このような遷移は、人為により促進することも可能であるが、全体的には自然力の活用により進むものであり、大がかりな事業の実施は不要と考えられる。

ただし、例えば、鹿の食害など、自然の遷移を阻害するものには対策が必要になる場合もある。

また、保全すべき対象がある場合は、当該箇所において、植栽や保育等の森林整備などの人為による管理が必要である。

（利活用について）

上記を踏まえ、森林の取り扱いについては、基本的に「手を入れない」管理でよいが、いろいろなタイプの森林をつくるなど、バラエティがあってもよいと考えられる。また、ダム周辺などのアクセスがしやすい場所に「放置した森林」「管理した森林」など、いろいろなタイプの森林が一目でわかる展示林を整備し、自然学習の場として活用してはどうか。

長期間利用してきた森林がどのように変化するのか、あるいは、それに伴い生態

系がどのように変化するのか、研究の場としても有用ではないか。

森林を「 の森」等として下流の自治体に解放し、交流の核とすることも一案としてよいのではないか。

紅葉のきれいな樹木の植栽など、ダム周辺などのアクセスのよい箇所は、手を入れる森林にしてもよい。

(その他)

下流域へのメッセージとしては「自然のまま残していくことが補償される」ということではないか。

他との違いとしては、「手を付けない取り扱いができる」ということや「太平洋側と日本海側への移行部分で多様性がある」ことが言えるのではないか。

また、手を付けないという管理は、一面では「贅沢」なことであると言えるのではないか。

以上